

によって、白人が不当な苦しみを与えられたことに激しく怒りながらも、その一方で植民地の貧しい人々や子どもを多数兵士として動員し、死傷させたことには特に感情をともなって言及していません。軍看護の無意味と思われるような規律の厳しさを批判し、看護婦の動員が民間医療の崩壊を招いたことも率直に語っています。日赤看護婦も同様のことを体験したと思いますが、ほとんど語らず、きわめて控えめに述べるにすぎません。言葉にすることが憚られた理由はいろいろあるのでしょう。論文中では、戦争では軍隊に近い組織になるほど、戦争の現実を語ったり、軍

隊を批判したりしにくくなるとし、一方で戦傷病者の看護も単なる人道的実践として語るならば見えてこない真実があるのではないかと投げかけましたが、それだけでもないような気がしています。戦争を直接体験した世代が私たちに伝えたかったことと共に、彼らにより語られなかったことと語られなかった理由について思いを巡らせながら、これからも戦争と看護を考えていきたいと思えます。

今後ともどうぞご指導よろしくお願ひいたします。

第32回矢数医史学賞を受賞して

西迫 大祐

沖縄国際大学 法学部

この度は、拙著に矢数医史学賞を賜りましたこと深く御礼申し上げます。荣誉ある賞を頂き大変光栄です。日本医史学会および選考委員の先生方に心より御礼申し上げます。本来、授賞式にてお話しさせていただくところ中止となり大変残念ではございますが、コロナ禍において、感染症研究である拙著がこのような形で受賞させていただくことは、ある意味でふさわしいのかもしれない。

先日『日本医史学雑誌』にて渡部幹夫先生に書評を頂きました。合わせて御礼申し上げます。渡部先生もお書きになった通り、私が本書を執筆している時に、今日のパンデミックは全く予想しておりませんでした。もちろんSARSやMERSなどの流行があったので、局所的な流行は高い確率で起きるとは思っていました。全世界的なパンデミックが起これば、まだ収束のめどが立っていないことに対して、大変驚いています。

本書「あとがき」にも書いたように、拙著は2008年に執筆した予防接種に関する論文をきっかけに、指導教授である土屋恵一郎先生の助言を受けて、2014年に提出した博士論文『感染症と

法の歴史』がベースとなっています。その時の締め切りが1月だったかと思いますが、すぐにエボラ出血熱の大流行が起きました。テレビで見たアフリカの光景は、拙著で研究

した18、19世紀のパリと重なるところがあり、不思議な思いでいたのを覚えています。

博士論文は企図は良かったと思いますが、上手くまとまっておらず、全体としてきちんとした形にするために、手直しすることにしましたが、そのために4年間悪戦苦闘することになりました。約2世紀という長い歴史を対象としたために、全体として上手くまとめるのに非常に苦労いたしました。しかしこの間に、エボラ出血熱についてのニュースを見たり、フレデリック・ケックの『流感世界』を読むなど、研究をまとめることが

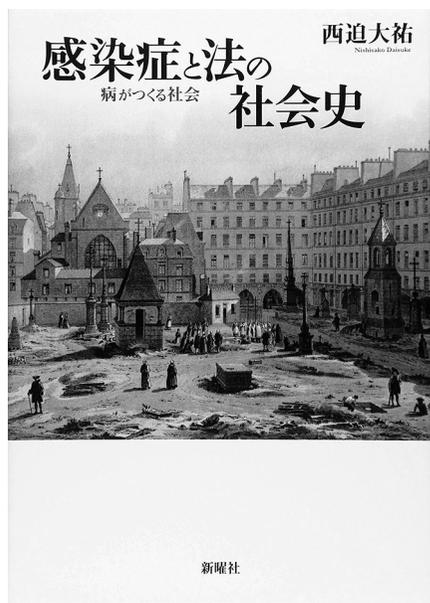


できるきっかけがいくつもありましたので、4年間苦しんだことは決して無駄ではなかったと思います。

私はミシェル・フーコーの研究からスタートした研究者です。フーコーや、フーコー派のフランソワ・エヴァルドなどの影響を受けて、「リスク」について歴史的な研究をしていたのですが、先に述べた予防接種の論文をきっかけに感染症の研究へと移っていきました。ですので、本書のねらいの一つは、公衆衛生や関連する法を、統治という観点から分析することでした。つまり公衆衛生は生命を救うものでもあり、同時に管理するメカニズムでもありうるということを浮き彫りにすることでした。特に統計的・数量的に捉えられる生命を生かすことが、ある人々の自由や生活を抑圧し管理することにもなることをどう考えればよいのかということが本質的なテーマになっています。

本書は、感染症と「法」というテーマはあまりなされてこなかった研究であると思いますので、その点において意義があると考えています。渡部先生が永遠の課題と書かれた通り、この衛生と自由のバランスをどうとるべきかという問題は、現在の私たちに突きつけられた問いであり、まだ十分な答えは出ていないように思われます。そのことを考えるために、数量的に把握される生命に対して、現実の人々の生活を対置するような、社会史という方法は私にとって魅力的に映りました。

本書は18・19世紀のフランスという一断面に



過ぎず、感染症と法、そして自由と衛生をめぐる研究のスタートだと考えています。今は19世紀のイギリスにおける感染症と法の研究を進めております。また渡部先生にもご指摘頂いたように、結核やインフルエンザなどが問題になる20世紀についての研究にも挑戦してみたいと思っております。この度矢数医史学賞という名誉ある賞を頂いたことで、より一層研究に邁進し、質の高い研究成果を発表していきたいと思います。この度は誠にありがとうございました。